マスター to アーティスト

【第2回】
＜2つの狭間から＞

扇千花

デザイン学部 クラフトブロック
テキスタイルデザイン選択コース准教授
1960年（昭和35年）、大阪生まれ。
京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程修了。
博士（美術）
2000年文化庁新進芸術家国内研究員

■主な個展
1998年　エキシビションスペース 東京国際フォーラム／東京
2005年　ギャラリーNAF／愛知
■主なグループ展
2001年　テクスチュアル スペース
–日本の現代テキスタイルアート（イギリス巡回）
2005年　Sign Post to a New Space-Concept,Collection,Collation
（ハロゲート インターナショナル センター・イギリス）
■主なワークショップ
2000年　横浜美術館／神奈川
2006年　サントリーミュージアム／大阪
■論文
2005年　空間表現のプロセス–美術活動における
インスタレーションとワークショップの相互影響関係–
（京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程）
2005年より現職

アート&デザインセンターギャラリーの一角、「新任教員展２００７」のために作成された作品「虹色シャワー」の、文字通り作品の内部。天女の羽衣のようなごく薄い布が垂れ込める。「豪華なベッドの天蓋みたい」「蚊帳の気持ちよさだよ、懐かしい」「子供なら大はしゃぎだね…」、口々に漏れる言葉に、にこやかに耳を傾ける。作品のある場から受ける感覚、それ自体を含めたものこそが作品と意図を話す。キーワードになるのが「ｂｌａｎｃ」。単に色を表す「白」というより、無を表す「空白」という意味のニュアンスが強い。好んで使う言葉という。

「物体と空間。物質が気体に変わっていくような、曖昧な領域にずっと興味があって…」

紙漉きや布の織り・染めの技法を使いつつも、その紙や布の端「エッジ」を意識する。はさみやナイフで切ったようにシャープに裁断されたものではなく、布なら糸のほつれがあり、紙なら繊維の一本々々が、それぞれに異なった表情を見せるエッジ。あたかも、物質が空気となって消えていくような…、そんな曖昧な存在が彼女を惹きつける。

「空間のなかに、曖昧な領域が増えることによって、その空間が変わります。その空間自体から見る人が受ける感覚。物と空間と人との関係を考えてきました」　作成する『もの』は、曖昧な空間を大きくするために、徐々に小さくなっていった。逆にその『もの』が影響を及ぼす空間は、広く大きくなっていき、その場所の、光や温度、季節感や訪れる観客までも、条件として取り込んでゆく。

「私のビジョンを伝えるのが目的ではなく、観客の心の中のことが作品なんです」

これまでに３つの大学で美術を学んだ。最初は、主にテキスタイルについて。そして、最後は彫刻。「私の作品が彫刻に移ってどう見えるか、エリアによって考え方が違うんです。そのことに興味があって」

テキスタイルはエリアでいえば工芸に属す。いわゆる美術とは、鑑賞者も、批評も異なる。興味の赴くままに、テー

『虹色シャワー』
2007年 名古屋芸術大学
アート&デザインセンター

『水上のひかり、水下のかげ』
2000年 リアスアーク美術館

『from heaven to hell』
1995年 元明倫小学校・京都

マを掘り下げ、思索は続く。

「テキスタイルにしても、彫刻、絵画にしても、それぞれ技法に依るところが大きいです。しかし、技法に向かうのではなく『もの』から離れたら、『もの』ではなく空間とがどう見えるのか、そのことに興味があるんです」　物質と気体、ものと空間、美術と人間、それぞれの狭間で関係を模索する

本学で教えるテキスタイルにも、この感覚は反映されている。「私は、テクニカルな教員というよりディレクターに近いと思ってます。学生が学びたいことのニーズとこの地域のニーズ、それぞれの条件に合わせたテキスタイルデザインコースを作ることが私の使命だと思うんです」　自分にない技術は、その技術を持った講師に来てもらい、それらを組み合わせることで条件を満たす。空間の広さ・光・温度と、学生や地域のニーズ。与えられた条件から、独自のテキスタイルという空間を提供する。作品と同じ考えが通底する。

大学という場所について、茶目っ気たっぷりに付け加えてくれた。

「私、美大が好きなんです（笑）。美大という場所は、もっとも自分らしくいられる場所。自分を表現することが一番いいこととされますね。それを見せられる形にまとめなければいけないけど、そのことを考える機会があるのは美大しかないんです。それで、つい舞い戻ってきちゃう」

テキスタイルとアート、教授と学生、美大と社会…、2つの狭間を往き来し、刺激を受け、楽しみ、考える。すべては繋がっている。

『虹色シャワー』作品内部を体験する学生